

研究開発の成果を一刻も早く より多くの患者さんへ

NCNPファミリーは“人々の幸福をめざし(vision)”、
“精神・神経疾患の克服(mission)”を通じてお手伝いいたします。

2016年に国立精神・神経医療研究センター (NCNP) の理事長としての所信を初めてお届けし、2017年から2019年の3年にわたり、患者さんの声、医療界と医学会のご意見、メディアを通じた国民の皆さんの声をお聞きしてNCNPのAnnual Reportに掲載してきました。この間、開発途上であった事業が実を結ぶなど、大きな成果をあげることができました。2020年度で、2015年度からの第2期中長期目標期間が終わります。少し早いのですが、ここで主な成果を振り返り、課題を明らかにして次への展望をお伝えしたいと思います。

デュシェンヌ型筋ジストロフィーのエクソン53スキップ薬・ビルトラルセンが5月に発売開始となり患者さんのお手元に届けることができました。また視神経脊髄炎では抗IL6阻害抗体薬サトラリズマブの国際共同治験を主導、その大きな有効性を証明し6月に製造販売が承認されました。精神疾患・障害では認知行動療法の有効性が着実に証明され、ニューロモジュレーション治療も開発が進んでいます。近年の日本はまさに災害大国ですが、PTSDの分子メカニズムにもつくメマンチン治療が開発され大きな期待が寄せられています。

しかし、これらの治療の効果もまだ十分とは言えません。神経難病は遺伝性、孤発性を含め膨大な種類がありますが、数としては孤発性疾患の方が遙かに多く、更なる薬効の向上、他の多くの疾患の治療法の開発が必要です。精神疾患・障害については、根本原因・機序の解明に本気で取り組むため、オールジャパンでスタートした「精神疾患の大規模レジストリ」を

着実に発展させる必要があります。同時に、現在実行可能な最適治療を全国に普及させなければなりませんし、それを裏付ける診療報酬などの医療福祉体制の構築が必要です。これらを達成するには、我々が、こころと脳・神経系・筋、およびそれらの疾患・障害の特徴をしっかりと理解したうえで、ゲノム・分子医学、iPS細胞・発生・再生・加齢医学、画像医学、データ医学、ICT、AIなど最先端の科学技術を使いこなすことが大切です。手法としても所信通り、事実をしっかりと把握し、本質的な目標をめざし、合理的・論理的に行動すること、さらに近遠・内外の研究者との交流を進め革新性、国際性、倫理性をより高めることも大切です。

健全な経営も当初目標の1つに掲げたとおり重要です。2018年度、2019年度には独立行政法人化以来の経常収支赤字を2期連続で黒字化できました。もともと精神疾患・神経難病は、全ての診療領域の中で、最も手厚い人手が必要であるにもかかわらず最も診療報酬が低い領域です。COVID-19の影響があり、今年度の経営は大変厳しい状況と言わざるを得ません。

COVID-19禍において、NCNPでは対策チームを設立し、徹底した感染症対策や近隣病院からの患者の一時受け入れなどを、職員の力を結集して行っています。社会全体の大きな変化の中、様々な分野で抜本的な改革が必要とされています。第3期に向けて精神・神経疾患の領域の大改革をNCNPから発信していく決意です。

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター (NCNP)
理事長 水澤 英洋

National Center of Neurology and Psychiatry